皮膚感染症と漢方

監修／渡辺　大輔 先生
愛知医科大学 皮膚科学講座・教授

皮膚の感染症にはダニなどの虫によるもの、真菌（カビ）によるもの、細菌によるもの、ウイルスによるものなど様々なものがあります。そのうち細菌によるものの代表例としておでき（せつ、よう）・とびひ（伝染性膿痂疹）、ウイルスによるものの代表例としていぼ（尋常性疣贅）・みずいぼ（伝染性軟属腫）があります。

一般に感染症に対してはその病原体に対する薬である抗生物質や抗ウイルス薬の飲み薬や塗り薬といった西洋薬が用いられますが、漢方薬も補助的に用いられる場合があります。また、ウイルスの多くには、それぞれの特効薬である抗ウイルス薬が存在しません。

今回は皮膚感染症のうち、細菌感染症、ウイルス感染症に焦点をあて、疾患の説明や対処法、漢方薬の役割についてなどを解説したいと思います。

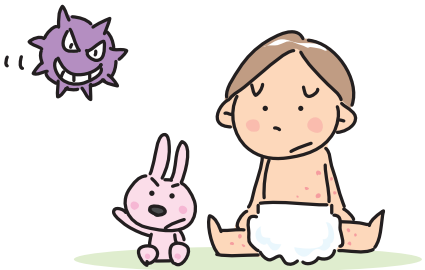
いぼ、みずいぼ治療の基本

1）いぼ

いぼの中でも、ウイルスによるものをウイルス性疣贅と呼びますが、原因になる病原体は、ヒトパピローマウイルス(HPV)です。このウイルスが皮膚の小さな傷から侵入し、皮膚の細胞に感染すると、細胞分裂が盛んになり、表面がザラザラとした盛り上がりとなりいぼが出来上がります。ウイルス性のいぼに対しては液体窒素による冷凍凝固療法やレーザー治療がよく行われますが、痛みを伴ったり、水ぶくれを作ったりします。また、ウイルスに直接効果のある薬はいまだに存在しません。

2）みずいぼ

みずいぼの原因は伝染性軟属腫ウイルスというウイルスです。子供に多い感染症で、やはりウイルスとの接触により感染します。いぼと違って、表面はツルツルしています。自然治癒を待つこともありますが、治療としては先の小さなピンセットなどで病変をつまんで内容物を出す治療も行われます。これも痛みを伴い、小さなお子さんには嫌がられる治療です。



いぼ、みずいぼに用いられる漢方薬

1）ヨクイニン

イネ科に属するハトムギの種子を乾燥した生薬で、いぼ、みずいぼの治療に用いられます。ウイルスに対する効果としては、NK細胞や細胞障害性T細胞といった抗ウイルスに働く免疫細胞を活性化させたり、抗体というウイルスと闘う物質の産生を高めたりする作用が考えられています。ただし、首いぼなどの加齢性のいぼに対する効果はありません。

ハトムギの種子

2）紫雲膏（しうんこう）

やけど、外傷や化膿性皮膚疾患に用いられる漢方外用薬の一つです。皮膚の乾燥、消炎、止血、殺菌、鎮痛などの効果があると言われていますが、ウイルス性のいぼに対しても効果があるという報告があります。

漢方薬は、症状のみならず患者さんの全身状態を診て処方されます。
漢方薬のご使用にあたっては、お医者さんや薬剤師さんにご相談ください。

2018年10月　発行：帝國製薬株式会社
〒769-2695　香川県東かがわ市三本松567番地
KAN-09-1-1810

細菌性皮膚疾患治療の基本

1）おでき（せつ、よう）

せつはブドウ球菌の感染により生じる皮膚の化膿性疾患です。毛包（毛穴）とその周囲の組織を侵します。ようは複数のせつが皮下で連結したものであり、せつよりも化膿が深く、傷あとを残すことがあります（瘢痕化）。

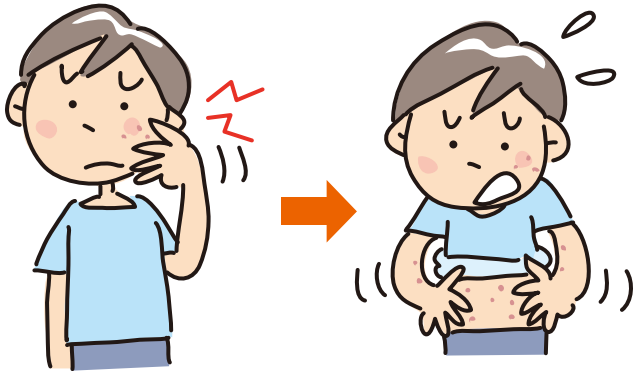
せつ、ようともに病初期は痛み・熱を伴う硬く赤い皮膚の盛り上がりですが、時間が経つと柔らかくなり、中に膿を持つようになります。

治療の基本は、病初期では抗生物質の使用、膿を持った病変では中の膿を出す（排膿）ために病変部の切開を行います。

2）とびひ

とびひも、ブドウ球菌や溶血性レンサ球菌といった細菌が原因となる皮膚感染症です。皮膚に水ぶくれができ、すぐに破れてじゅくじゅくになったり、かさぶたができたりします。

病変部と接触するとその部位に感染って、火事の飛び火のようにあっと言う間に広がることから“とびひ”と言う名前がついています。皮膚の傷のある部分だったり、あせもや虫刺され、湿疹などをひっかいたりして、そこに細菌が感染するととびひになります。軽度のとびひは抗生物質の塗り薬で治療しますが、病変の数が多い場合は抗生物質の飲み薬を使います。最近、MRSAという、通常の抗生物質が効きにくいブドウ球菌が原因のとびひが増加しているため問題となっています。



皮膚の一部にできた
水ぶくれやただれが…

あっという間に
体のあちこちに「飛び火」する

おでき、とびひに用いられる漢方薬

1）十味敗毒湯（じゅうみはいどくとう）

十味敗毒湯は、世界で初めて全身麻酔下で乳癌の手術を行ったことや、小説「華岡青洲の妻」でも有名な華岡青洲の考えた処方です。現在でも皮膚の化膿性疾患をはじめ、湿疹・皮膚炎、じんま疹、時には水虫など幅広い皮膚疾患に用いられています。十味敗毒湯には様々な薬理作用があることが知られていますが、そのうちの抗炎症作用や、細菌などの排除に必要な白血球である好中球の機能を高める作用が細菌感染症に対して効果的である理由とされています。

2）排膿散及湯（はいのうさんきゅうとう）

排膿散及湯もまた、華岡青洲が開発した漢方薬です。「排膿散」と「排膿湯」の合剤で、排膿散は化膿性炎症の患部が赤く腫れ、痛みのある場合に鎮痛薬のような働きをします。

一方、排膿湯は、膿が溜まった状態の病変から排膿を促す効果があり、おできに対して非常に合理的な漢方薬です。また、MRSAが原因のとびひに対して、抗生物質入り軟膏と排膿散及湯の内服で治療できたという報告もあります。